

産学交流シンポジウム
— 21世紀にむけて — デザイン教育は何をすべきか？

■日時：1999年12月11日(土) 午後3時～5時半
■会場：女子美短大(杉並校舎) 3号館 346番教室

主催 日本テキスタイルデザイン協会
共催 女子美術短期大学

◎パネラー

- | | |
|-------------------------------|---|
| 1. 「業界のテキスタイルづくりから」 | 新井明子氏 ㈱アコスファブリックハウス I F I ビジネススクール講師 |
| 2. 「企業の生産現場より」 | 本田純子氏 ㈱川島織物 インテリア開発部デザイン室 |
| 3. 「コンピューターのテキスタイル現状から」 | 植田光紀氏 ㈱島精機製作所 |
| 4. 「フリーランサーの立場より」 | 佐口昌司氏 市田・西川産業・日清紡・テパートなど業界のデザインワークを多数手がける |
| 5. 「グラフィックデザインから見たテキスタイルデザイン」 | 下田一貴氏 ㈱ライオンの広告・制作を手がける 広告・CM賞を多数受賞 玉川大学教授 |
| 6. 「大学のテキスタイル教育環境より」 | わたなべひろこ氏 多摩美大教授・TDA副理事長 |
- フリートーク —

◎トークオブザーバー

- | | |
|----------------------------|-----------------------------------|
| 福田行雄氏 ㈱東リ デザイン室 | 津島栄一氏 大塚テキスタイル専門学校教授・ファッションディレクター |
| 村口映子氏 インテリアデザイナー・デザイン事務所主宰 | もたい穂氏 女子美短大教授・舞台衣裳演出家 |
- ◎コーディネーター／進行 荒井 健 TDA理事 ※ワーキンググループ 小山欽也／小林信恵／浦田純代



新井氏 本田氏 植田氏 佐口氏 下田氏 わたなべ氏 福田氏 津島氏 村口氏 もたい氏 荒井氏



12月11日(土)に女子美術短期大学(杉並校舎)で行われた、TDA教育研究会企画による産学交流シンポジウム「21世紀にむけてデザイン教育は何をすべきか？」をレポートします。

今回のシンポジウムをコーディネートされたのは、当日、司会進行をされた女子美術短期大学教授の荒井健先生。パネラーとして、㈱アコスファブリックハウスの経営者であり、また、I F I ビジネススクール講師もなされている新井明子氏、㈱川島織物インテリア開発部デザイン室の本田純子氏、㈱島精機製作所の植田光紀氏、フリーランサーで繊維業界のデザインワークを多数手掛けている佐口昌司氏、玉川大学教授でもあり、多数の広告・CM賞を受賞されているグラフィックデザイナーの下田一貴氏、多摩美術大学教授でもあり、TDA副理事長のわたなべひろこ氏。また、トークオブザーバーとして、㈱東リ、デザイン室の福田行雄氏、大塚テキスタイルデザイン専門学校教授でもあり、ファッションディレクターの津島栄一氏、インテリアデザイナーとしてデザイン事務所を主宰されている村口映子氏、女子美術短期大学教授でもあり、舞台衣裳演出家のもたい穂氏。

次に、各パネラー及びトークオブザーバーの発言内容の要旨をまとめてみます。

新井明子氏 — 「業界のテキスタイルづくりから」

“デザインという作業は自分の中で完結するだけでは成り立たない。他人に喜んで買ってもらい、その人の生活の中にとりこまれて初めて成立する。”
“すぐやめてしまおう、言わば消耗品のようなデザイナーが最近多い。将来デザイナーをめざす学生は、今から自分は何をしたいのかを明確にとらえることが必要” “就職出来なければ自分でやるくらいの心構えと行動が必要”

本田純子氏 — 「企業の生産現場より」

“企業のモノづくりには消費者側に立ったモノづくり(不特定多数が対象)と作り手のわがままを通すモノづくり(作り手のオリジナリティが大切)の2種類がある。企業のデザインは常にその2つの考え方が頭の中で衝突している。” “様々な商品が氾濫する中で、自分は何ものなんだろう、好きなものは一体何なんだろう、とさんざん悩んで生まれたものが本物の商品のような気がする。” “自分の仕事に行き詰まった時は、まず手を動かし、そして現場に赴くようにしている。”

植田光紀氏 — 「コンピューターのテキスタイル現状から」

コンピュータグラフィックスによる商品イメージの展開方法(マッピング・配色・リピートづけ等)がどのくらい進んでいるかについて、OHP上映を交え解説。“コンピュータグラフィックスを使ったプレゼン方法により、企業では商品開発の意思決定が迅速になった。” “モノを作ったら売れる時代から、21世紀は消費者の付加価値(心の満足度)が高まる商品開発の時代である。”

佐口昌司氏 — 「フリーランサーの立場より」

“価格で勝負してきたアジアの商品とデザインの優位性で勝負してきたヨーロッパの商品の中で、日本の企業はバランスのとれた品揃えで勝負してきた。そんな中、今後はダイナミックさとスピードでアメリカの商品が日本市場を狙っている。” “今後、デザイナーは芸術と芸術の間を考えた、或いはまったく異なる分野のモノを結びつけたらいい発想が大切”

下田一貴氏 — 「グラフィックデザインから見たテキスタイルデザイン」

“人間は極限にまで追い詰められ、ぎりぎりの選択を迫られなければ自然と共生することはできない。” “コンサートがあれば、たとえ何日かけても会場に足を運び、徹夜で踊りに興じるアフリカ人の感性は非常に豊か。人間は遊ばなければ自分を発見出来ない。” “本物を何度も見ることで、本物と偽物を見分ける方法はない。”

わたなべひろこ氏 — 「大学のテキスタイル教育環境より」

“21世紀は様々な意味でエキサイティングな時代。21世紀は日本が世界の繊維産業を引っ張っていく時代になって欲しい。” “今後、大学はテクノロジー、素材、感性をうまく融合させた教育をする必要がある。” “時代とともに学生の気質の変化に対応し、大学も個性化していかなければならない。” “21世紀は、原点・最先端・若いエネルギー・世界を対象として生きる方法論、を押さえておくこと” “キーワードはヒューマンピーキング”

福田行雄氏 — 「クリエイションという言葉の中にはレポリューションという意味も含まれている」 “学校が個性をのばすきっかけを作る教育をして欲しい。”

津島栄一氏 — 「教育というものはすべて未来に対するイメージから生まれてくる。」 “学生には自分が主役という気持ちで、常にオーラを発して欲しい。”

村口映子氏 — 「デザイナーは感性を磨くことが大切だが、わかまな感性は必要無い。」 “学生の時にできる勉強と社会に出てからできる勉強を区別することが大切。”

もたい穂氏 — 「ひとつの作品を作る為に曲げるところまで曲げ、役者や演出家とけんかした方が、良い作品ができる。」 “これからはひとつの分野にとらわれず、総合的にからめた教育が必要。”

以上簡単ではありますが、レポートしました。また、当日は学生とのフリートークもあり、予定時間を1時間半ほどオーバーするなど、活発な意見交換が繰り広げられたシンポジウムとなりました。私もフリーのデザイナーとして、また一部教育に携わるものとして、とても勉強になりました。ただ、私にとって、ひとつだけ残念なことは、シンポジウムの終了が予定時間を大幅にずれた為、楽しみにしていたその後の懇親会に、私用の為、参加できなかったことです。(レポート 中島 よしひろ)